

## 死に臨んで日本人は何と叫ぶか



顧問・東京大学名誉教授 平川祐弘

### 私たちもまた覚悟を新たにする時

第二次世界大戦後に米国を中心に出来上がった国際秩序は、東西冷戦に米国が一九八九年に勝利したことにより、さらに安定するかにその時は思われた。だが、その三十年後の今日、アメリカ中心の世界秩序には大きな<sup>ほころ</sup>綻びが生じ、ウクライナ、パレスチナ、台湾海峡など地球各地で武力衝突の悪化が懸念される。悲観的な予想をすれば、いまや世界には第三次大戦前夜という暗い雰囲気すら漂い始めた。気がつく<sup>は</sup>と日本列島は日清戦争前夜に似る、不穏な敵対的国際環境に取り囲まれている。しかもその敵対勢力の武力は<sup>せきじつ</sup>昔日の比ではない。

私は第二次世界大戦を銃後で体験し、従兄の一人も戦死したが、昭和天皇の時代に人生の三分の二を過ごしたことを幸運と感じている。満洲事変勃発の一九三一年の生まれだが、一、昭和の大戦を内地で生き、二、日本の敗北を体験し、三、米軍占領下、戦中派が中心となって日本の再建につとめた時期に学生として学び、四、米国中心の世界に経済大国日本の一員として生きた。五、だがその穏やかだった<sup>ほ</sup>既定秩序は綻びつつある。

令和の時代、日本はかつてない軍事的脅威に潜在的にさらされている。それにもかかわらず私の少年時代との違いは、日本人に、いざとなれば死なねばならぬ、

という覚悟が要請されていないことだろう。そのような覚悟を求められないことを無条件によしと言えるだろうか。日本は現行憲法が言うような「平和を愛する諸国民の公正と正義に信頼して」「陸海空軍その他の戦力はこれを保持せず」に生きていけるような、お目出度い状況下にある国なのだろうか。

一九四五年の敗北以来八十年間、受身的に平和を享受してきた日本人は、昨今のそうした客観的事実の変化にもかかわらず、主観的に一國平和主義を良しとする人が多い。多いと現在形では言わずともつい最近まで多かった。平和の<sup>あんいっ</sup>安逸と幻想に<sup>ふけ</sup>耽る人たちであった。楽天的ともいえるが、日本国民はそんなに呑気であっていいのだろうか。そのような戦後民主主義世代の惰性的な生き方に対する不安と懸念から日本戦略研究フォーラム編集部は、年長者の私（満九十三歳）に過去一世紀をかえり、私たちにいま一度新たに何に思いをいたすべきか、二〇二五年を迎えるに際し再考せよという。そこで日本人が心すべき覚悟について一言私見を述べさせていただく。人間「死ぬ前の覚悟」などと言うと一見古色だが、それが古色蒼然でなくなったのは日本をとりまく情勢がそれだけ緊迫したからである。

## 死を覚悟した昭和の大戦

昭和の大戦下の日本で育った私たちの世代が覚悟したのは、いざとなれば死なねばならない、そして戦死する際は「天皇陛下万歳」と叫ぶ、ということであった。その覚悟は子供心にも刻み込まれた。「海ゆかば水漬く屍、山ゆかば草むす屍」と小学生の私は歌った。昭和十九年夏、その《海ゆかば》の曲に続きサイパン島の守備隊玉砕の大本営発表がラジオを通して流れた。米国機動部隊は意想外に急速に中部太平洋を北上した。軍国少年は戦局の不利を感じ、中学一年生の私は軍の学校を志願した。十月、フィリピンで海軍航空隊の関大尉以下の神風特別攻撃隊は敵艦へ体当たり攻撃を行なった。その散華の報に非常な感銘を受けた。と同時に特攻隊員はあくまで志願制であるべきで、そうでなくて若者がほぼ強制的に往きて還らぬ攻撃に参加を求められるのは困る、と口には出さなかったが子供心にひそかに思った。

「本当は『天皇陛下万歳』とって戦死する兵士は多くない。第一次大戦でフランス兵は『お母さん』と言って息絶えた人が多かったそうだ」と上級生が言った。その「ママン」の言葉が印象に残った。戦後、阿川弘之の小説『雲の墓標』に特攻隊員に選ばれたものの、決死の出撃を目前にして、生への執着を捨てきれず、訓練飛行中、故意に不時着、大怪我をしてもよいから生きのびたい、という気持ちに囚われた学徒兵の心理が描かれていた。それを読んだ時、それもまた真実だろう、と思い卑怯者と思わなかった。それは私の読書が敗戦後数年経った時だったからかもしれない。

やがて、イスラム過激派に爆薬を詰めた服をまとい敵陣に飛び込む者があらわれた。彼らもカミカゼと外国で呼ばれることを知り、市民を無差別に殺戮するアラブの狂信者の自爆テロと目標を軍事施設に限定した日本の神風特攻隊とは違う、と言い張りたい気持ちにかられたが、イスラム圏の人々はそんな違いは認めず、共に殉教者と見做すだろう。「アラーは偉大なり」と「天皇陛下万歳」と同じか、同じでないのか。背景にあるイスラム教と日本の神道とはどこが共通で、なにが違うのか。これは別に考慮すべき問題である。

## 知覧の特攻資料館

日本人は知覧の特攻資料館を見学すればおのずと厳粛な気持ちになる。中国人の参観者の中にはこの種の施設そのものに反撥する者もいるようだが、現在は平和な日本も一旦敵にまわせば恐るべき国になるぞ、と彼らは感じて大陸へ戻ることだろう。であるとすると、特攻隊員の英霊は死後もなお日本を護る護国の勇士なのである。私はある種の歴史家や新聞人のように特攻隊員の死を犬死などと呼ぶ不遜な真似はできない。

パリ五輪で卓球女子シングルスのメダルに輝いた選手が、「大会を終えて行きたい場所は」とマイクを差し出され「鹿児島の特攻資料館」とあどけない表情で答えた。その声を耳にして、私ははっとした。そして嬉しく思った。昭和の大戦で戦死した若者たちも、その遺族も、心慰められる彼女の発言であつたらう。前に東大の同窓会で「知覧へ行って展示された遺書や遺品にたいへん心動かされました」と女子学生が目には涙を浮かべて語ったが、それを聞くうちに、亡くなっ

た勇士たちの凛々しい顔に微笑が浮ぶような気持がした。高倉健が演じた映画『ホタル』を見たときは、朝鮮半島出身の特攻隊員の遺族の苦しい立場が偲ばれた。

戦後生まれの日本人は平和な日本で生きていることは当たり前のように暮らしてきた。戦前派も戦中派も、戦争体験者すらも、表面はそうであった。しかし「生きていること、当たり前じゃない」と西暦二〇〇〇年生まれの前田ひな選手は、国際試合を勝ち抜いた直後に、言ったのである。

少年の私にとり敗戦は口惜しいことではあった。が、大戦を死なずに生きのびた、ということは、本能的次元では、ほっとした気持であった。それが私の正直な気持であるばかりか、日本国民の多くの気持でもあったろう。その後私たちは死を覚悟することなく平和に暮らすこととなった。欧州では負けた国の若者はまた銃を持たされる。イタリアはバドリオ内閣が一九四三年九月英米に降伏したが、十月にはその同じ内閣によって対ドイツの戦にイタリア兵はまた動員された。一九四五年、日本人は銃も剣も没収されたから、一九五〇年六月に朝鮮で戦争が勃発しようが私たちは呑気に暮らしていたのであった。

## 昭和天皇の御覚悟

日本国民の多数が昭和天皇に対し深い敬愛の情を抱いているのは、陛下が玉音放送で終戦を告げられたからである。

昭和天皇は八月九日と十四日の最高戦争指導会議の席上、戦争継続派と戦争終結派の数が同数で拮抗、対立して結論がなかなか出せなかったが、天皇は終戦派の意見をしっかり支持された。その御聖断と言われる決断に揺らぎはなかった。

その際、敗軍の将として大元帥陛下はどのような御覚悟であったか。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひ  
いくさとめけり  
身はいかならむとも

身はいかにならむとも  
いくさとめけり  
ただたふれゆく民をおもひて

陛下はこのように「身はいかならむとも」の御覚悟で終戦の決断をされ、かつ実行された。

すなわち昭和二十（一九四五）年九月二十七日、占領軍総司令官マッカーサー元帥を訪問され、陛下は次のような趣旨を述べられた。「私は、日本の戦争遂行に伴ういかなることにも、また事件にも全責任をとりまします。また私は、日本の名においてなされた、すべての軍事指揮官、軍人および政治家の行為に対しても直接に責任を負います。自分自身の運命について貴下の判断が如何様なものであろうとも、それは自分には問題でない。私は全責任を負います」。

昭和天皇のこの言葉に感銘を受けた人は、第一にそれを聞いた占領軍総司令官マッカーサー元帥である。元帥は陛下のこの言葉を後世に伝える人となった。日本国民から深く敬愛されている天皇裕仁を戦争犯罪人に仕立てることは無理である。そんなことをしたら日本の占領統治がうまくゆかなくなる。そのことが天皇の命を救った主要原因であったにせよ、陛下に「身はいかにならむとも」の御覚悟があったこともまたまちがいない。

東條英機元首相は、負ける戦争を始めた責任は重いが、東京裁判においては死

刑必至と見通していたから、最後の覚悟に揺らぎはなく、日本のためにきちんと弁じた。キーナン首席検察官と対峙した東條被告の答弁についてA級戦犯として同じく法廷に連なった重光葵元外相は『巢鴨日記』にこう記録している。

《東條は少しも責任は避けず部下、同僚を擁護し、天皇陛下の御仁徳を頌し、法廷に対しては謙譲の態度を示し、検事に対しては堂々と主張を明かにす。キーナン敗北とは米人弁護人等の批評なり》

### 米国軍に占領された幸運

大陸に軍事介入し後戻りできなくなった日本の軍部は、国を誤まった。大失態である。大東亜共栄圏の構築に失敗し、破れるべくして敗れた昭和日本であったが、占領軍による東京裁判も「勝者の裁判」であつて、不当なものであった。しかし相対的に言うならば、降伏した日本が、ソ連軍や中国軍や朝鮮軍でなく、主要敵米国軍を中心に占領されたことは幸運であった。その事情は東アジアだけでなく西ヨーロッパでも同じだった。敗戦ドイツは米・ソ・英・仏などに分割占領されたが、ソ連に占領された東ドイツは悲惨であった。その事は東ドイツから西ドイツへの脱出者が絶え間なく続いたことからわかる。米国がマーシャル・プランで西ヨーロッパの復興を助けたことも敗戦国の独伊がその後長く親米となった理由であった。

一九八九年、ベルリンの壁が崩れ、ソ連東欧の社会主義体制が崩壊したとき、これから先は永く米国の一強体制が続くであろうという希望的観測が広まった。冷戦に勝利した米国は、社会主義体制の疲弊で負けたロシアにこの時こそ新しい

マーシャル・プランで自由主義経済による再建を助けるべきだったのだろうが、それは手にあまることだったのだろう。毛沢東死後の中国も次第に豊かになり、小市民的な西側の価値観が流布するかに思われたが、その期待もまた空しかった。

私は昭和六年生れ、中学生の頃は軍事教練を受けた。運動部に柔道部・剣道部の外に銃剣道部があり、私はそれを選んだ。昭和二十年春、ドイツが敗北し、日本も本土の都市が次々と爆撃で焼かれると「もう勝ち目はない」と子供心にも予感された。それでも「日本は負けない。日本は降伏しないから」などと強がり言っていた。それが八月十五日、「日本国民は総力をあげて本土決戦を戦ひ抜け」の訓辞でもあろうかと思っていたところ、昭和天皇は終戦の詔勅を読み上げられた。この玉音放送で私どもは生きのびることを得たのである。

### 死ぬ覚悟のあるなし

戦前と戦後の違いは、かつての日本は明治・大正・昭和前期を通して戦地において死に臨み「天皇陛下万歳」と叫ぶ言葉があったが、戦後にその言葉が消えたことである。消えた事を以て良しとする人も多いかもしれない。戦後の天皇陛下は大元帥ではなく、自衛隊員は死に臨んで叫ぶべき言葉を習わなくなった。

英国では王室の地位は戦前・戦後において変りはないが、そこが日本皇室との違いであろう。(英国王室で変わりがあるとすれば第二次大戦中は King's Navy であったのが、フォークランド戦争当時は Queen's Navy だったことだろう。今は又キングズ・ネイヴィーに戻ったが)。英国王室と英国軍の関係は以前のままである。



国王や天皇は国の象徴であり、言ってみれば国旗のようなものともいえよう。日の丸の旗が日本人にとってどれほど親しいか、日章旗が何を意味するかは、次のような比較で明らかとなるだろう。日本国民の多くは一旦緩急あれば日の丸の旗の下に馳せ参ずるだろう。これが国連旗であると、その旗の下に集合し、その下で血を流せ、と言われても、そうはいかないのではあるまいか。日の丸と違い国連旗には美学的にも情情的にもやすやすとなじめない。歴史ある国の人々は、例えば英国人はユニオンジャックの旗の下に、フランス人は三色旗の下に、結集するのではあるまいか。

しかし旗の下よりも「大君の<sup>へ</sup>邊にこそ死なめ」というのが日本人の伝統的な人間感情なのであろう。吉田茂は剛腹<sup>ごうぶく</sup>な政治家で愛国者であった。こうした人物が「臣茂」と平伏するのは天皇に対してであった。「君臨スレドモ統治セズ」という天皇という権威の前に吉田首相という権力者も低頭した。

### 独裁者の神格化許さぬ立憲君主

多くの人は気づかないが、「スターリン万歳」「ヒトラー万歳」「毛沢東万歳」と「天皇陛下万歳」には質的相違がある。伝統的な王室が消失した国に限って、権力と権威を一身に集めた専横な独裁者が現れ、暴虐の限りを尽した。それに対し独裁者の神格化を許さない立憲君主の存続は尊く有難い。

戦後の日本は中途半端である。日本の

軍隊はいまは皇軍ではない。日本の自衛艦には菊の御紋章はあるのだろうか。艦上では国歌《君が代》の吹奏はまちがひなくあるだろう。だが戦死者・殉職者が《海ゆかば》で葬送され、靖国神社に護国の英霊として祀られることはまだ確立していない。私はそれを戦後日本政治の懈怠<sup>けたい</sup>であると感じている。

人間は事に臨んで死を覚悟し、この世を去るに際して叫ばねばならぬ時がある。かつて日本人は「天皇陛下万歳」と叫んで死んだ。これからは「日本国万歳」Nihonkoku Banzai と叫んで死ぬことになるのだろうか。もちろん戦死者は出ないのが望ましい。しかし万一の事態を予想せず準備と覚悟をおろそかにして良いはずはない。

信時潔作曲《海ゆかば》はアメリカ占領軍のお達しで、私たちは歌うことを禁じられた。NHKは今もGHQの指令を遵守している。敗戦後の若かった私も、《海ゆかば》は戦没学生の手記などと両立しない軍国日本の歌ときめてかかった時期があった。しかしそれはあさはかな間違いであった。私は近ごろ《海ゆかば》をあらためて聞きなおし、声に出して歌うと、大和朝の大伴家持<sup>おおとものやかもち</sup>の歌が千三百年後の昭和のわだつみの声に和して聞こえる。遥かなる山河で戦没した先輩たちの霊も、いまは《海ゆかば》のおおいなる曲に包まれているかに感じられる。私の心の底から湧きあがるのは、そのような死者（刑死者を含む）を弔う気持である。